

月の皇子

——柿本人麻呂が描く草壁皇子

古川のり子

草壁皇子は天武天皇と持統天皇の間に生まれ、皇太子として万機を委ねられたが、ついに皇位に就くことなく、息子の軽皇子（のちの文武天皇）を残して、持統三年（六八九）二八才で薨去した。『万葉集』に自作の歌が一首（二一〇）ある他は、とくに目立った業績は伝えられていない。しかし草壁皇子は死後「日並（ス）皇子」（ひなみしのみこ）という、彼だけに用いられる特別な名称と呼ばれた。その「日並」は「日があいならぶこと」、「日（天皇）と並んで天下に臨む」意であると解釈されている。また柿本人麻呂は『万葉集』に、日並皇子を追慕する二群の歌を残した。神野志隆光氏によれば、「日並皇子」の名は人麻呂によって作り出され、諡号として一般化したものだとい^{注1}う。日並皇子や人麻呂の歌については万葉集の研究者によってすでに充分に研究されており、新たなことを言う余地はないが、ここでは人麻呂歌中の「日並皇子」に認められる、「月（ツクヨミ）の皇子」としての性質について少し考察を加えてみたいと思う。

Ⅰ 人麻呂の歌の解釈について

柿本人麻呂が日並皇子を偲んで詠んだのは、日並皇子の挽歌（一六七―一七〇）と軽皇子の安騎野遊獵歌（四五―四九）の二群の歌である。

A 日並皇子尊の殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌一首

并せて短歌

一六七 天地の 初めの時 ひさかたの 天の河原に 八百万

千万神の 神集ひ 集ひ座して 神分り 分りし時に

天照らす 日女の命へに云ふ、さしのぼる日女の

命、天をば 知らしめすと 葦原の 瑞穂の国を

天地の寄り合ひの極 知らしめす 神の命と 天雲の

八重かき別きて へに云ふ、天雲の八重雲別きて

神下し 座せまつりし 高照らす 日の皇子は 飛鳥

の 淨の宮に 神ながら 太敷きまして 天皇の敷き
ます国と 天の原 石門を開き 神あがり あがり座
しぬへに云ふ、神登りいましにしかば、吾が王
皇子の命の 天の下 知らしめしせば 春花の 貴か
らむと 望月の 満しけむと 天の下へに云ふ、食
す国、四方の人の 大船の 思ひたのみて 天つ水
仰ぎて待つに いかさまに 思ほしめせか 由縁もな
き 真弓の岡に 宮柱 太敷き座し 御殿を 高知り
まして 朝ごとに 御言問はさぬ 日月の 数多くな
りぬる そこゆゑに 皇子の宮人 行方知らずもへに
に云ふ、さす竹の皇子の宮人ゆくへ知らにす

反歌二首

一六八 ひさかたの 天見ることく 仰ぎ見し 皇子の御門の
荒れまく惜しも

一六九 あかねさす 日は照らせれど ぬばたまの 夜渡る月
の 隠らく惜しも

或る本の歌一首

一七〇 島の宮 勾の池の 放ち鳥 人目に恋ひて 池に潜か
ず

B 輕皇子の安騎の野に宿りましし時、柿本朝臣人麻呂の作る

歌

四五 やすみしし 吾が大王 高照らす 日の皇子 神なが
ら 神さびせすと 太敷かす 京を置きて こもりく

の 泊瀬の山は 真木立つ 荒山道を 石が根 禁樹
おしなべ 坂鳥の 朝越えまして 玉かざる 夕さり
くれば み雪降る 安騎の大野に 旗薄 小竹をおし
なべ 草枕 旅宿りせず 古思ひて

短歌

四六 安騎の野に 宿る旅人 打ち靡き 眠も寝らめやも

古思ふに

四七 ま草刈る 荒野にはあれど 黄葉の 過ぎにし君が

形見とそ来し

四八 東の 野に炎の 立つ見えて かへり見すれば 月傾

きぬ

四九 日並斯の 皇子の尊の 馬並めて 御狩立たしし 時
は来向ふ

A 歌群（日並皇子挽歌）については多くの研究者たちによつて、いくつかの点を除きほぼ一致した解釈がなされてきた。天地の初め、天の神々が集まって相談した時に、「日女の命」（アマテラス）は天を治め、「神の命」（天孫ホノニギ）は葦原の瑞穂の国を治めることになった。八重雲をかき分けて天降った「高照らす日の皇子」（ホノニギ・天武天皇）は、飛鳥の淨見原の宮で統治し、やがて亡くなつて天の原の石門を開き上つて行つた。そこで「吾が王」（日並皇子）が天下を治めるはずが、彼までも亡くなつて真弓の岡の殯宮に入られたことを嘆く（一六七）。ここで人麻呂は、『古事記』、『日本書紀』の天孫降

臨神話や天の石屋神話にきわめて近い神話を背景に、「高照らす日の皇子」として、天孫ホノニギと天武天皇とを重ね合わせ、日並皇子をアマテラスに遡る「日の皇子」の王統に位置付けていると解釈されている。^{注2}

また反歌では皇子不在の悲しみを歌い、とくに一六九番歌では、日並皇子の薨去を月の隠れることに喩え、持統天皇はいらっしゃるけれど（日は照らせれど）、皇子が亡くなられたことを惜しんでいる（夜渡る月の隠らく惜しも）とされる。

一方、B歌群（安騎野遊獵歌）については古くから様々な解釈がなされてきた。この歌は、日並皇子の死の三年後、彼の息子である軽皇子（一〇才）が宇陀の安騎野に出かけ、一夜の宿りをした時のものである。亡き日並皇子がかつて狩獵に訪れたこの地で、人麻呂は彼への追慕の念を中心に歌を詠む。

長歌（四五）では、「やすみしし 吾が大王」、「高照らす日の皇子」である軽皇子が、都を出て泊瀬の山を越え安騎野に至るまでの行程を描く。「真木立つ 荒山道を 石が根 禁樹おしなべ」とあるように、荒ぶる草木や岩を押し伏せて突き進むその様子は、天孫降臨神話を彷彿とさせる。つとに指摘されているように、「石が根 禁樹」が軽皇子の行く手を阻む山中は、「草木成に能く言語あり」（日本書紀九の本文）、「磐根・木株・草葉も猶能く言語ふ」（同九の六）と描写される平定以前の葦原の中つ国の様子であり、それを押し伏せる軽皇子は天降るホノニギの姿と重なり合う。渡瀬昌忠氏によれば、天武天皇もまた人麻呂によって「真木立つ 不破山越えて 高麗剣 和射

見が原の（行宮に 天降りいまして 天の下 掃ひ給ひて 食す国を 定めたまふ）（一九九、一云）と歌われ、天降り平定する神として描かれている。したがって長歌（四五）の「高照らす日の皇子」は軽皇子は、葦原の中つ国を平定する始原の「皇孫」の神であり、また天武天皇と同質の「神」として表現されているのだという。^{注3}

長歌の後段から短歌（四六、四七）では、亡き日並皇子の「古（いにしへ）」を思つて旅寝をする夜が歌われる。この宿りが行われた日は、冬至の頃であつたことが明らかにされている。^{注4} また宇陀・安騎野の地は、神武天皇が頭八咫鳥に導かれて入り、兄猾を滅ぼし、鬚齋を行ったと伝承される地であり（神武即位前紀）、壬申の乱の初日に天武天皇が草壁皇子等と共に宿つた地（天武紀元年六月甲申）でもある。この土地における一夜の意味については、様々な解釈がなされてきた。坂下圭八氏は、安騎野の狩りは軽皇子の成年式であるとする。冬至の時に皇子はここで子供として死に大人として蘇るのだという。^{注5} 上野理氏は、これを皇位に就くための通過儀礼であるとする。記紀においてオホナムチやヤマトタケルが狩り場で受難する話などをあげ、皇子が死を賭して狩りを行い、しかるのちに皇位に就くといった考えがあつたとする。^{注6} 森朝男氏はさらに、冬至の頃の安騎野での一夜について、大嘗祭の祭式時間を詩的に表現したものだという。^{注7} また辰巳正明氏は、皇室に縁の深い安騎野で、日月祭祀を伴う皇祖天神の祭式（中国の郊祀に基づく王権祭祀）が行われたと見る。^{注8} いずれにしてもこれらの

説は、安騎野の一夜を、軽皇子が皇位継承者に相応しい存在として生まれ変わるための特別な夜であったとみなす点で共通している。

四八、四九の短歌には、この夜を過ごした後の夜明けの様子が歌われる。有名な四八番歌では、東の野に立つ「炎（かざろひ）」とかえり見た西に傾く「月」とが対比される。この「炎」―曙光が、生まれ変わった「高照らす日の皇子」⇨軽皇子を表しているとは多くの研究者に一致した見解である。新たに出現したこの「太陽」は、軽皇子であると同時に日並皇子でもあり、軽皇子がここに「日並皇子（天武に並ぶ皇子）」となって再生を遂げたのだという。この場合、「太陽⇨日並皇子⇨軽皇子」の一体性が強調され、西の空に沈む「月」はとくに問題とされない。多くの研究者はこの立場に立つ。

一方、傾く「月」が日並皇子を表すとする研究者もいる。^{注10}上野理氏は、日に並ぶものは月であり、『日本書紀』に月神が「日に配」ぶものと記されること、一六九番の挽歌で人麻呂が日並皇子を「夜渡る月」に喩えたことをあげ、次のように述べている。

「月」が日並なら、「炎」は軽であろう。悲しみに沈んだ供奉者たちは、東の空にかすかな光をみ、ふりかえってまた月の傾きに、曙光であることをさとり、月に代ってまもなく輝く太陽がさしのぼることを考え、その光明に悲しみを克服するのであろう。^{註11}

しかし「月」をこのように理解する研究者たちも、最終的には「月」⇨日並皇子が、新しい「太陽」⇨軽皇子となって生まれ変わったのだと解釈する。上野氏は先のように述べた後で、このような結論を提示している。

（四九番歌で）軽皇子の出發を賀しているが、これを直接にはいわず、日並皇子がかつて馬をならべて朝狩に出發した、その時刻がきた、といって、馬上の軽皇子の姿を、かつての日並皇子の英姿に重ね合わせる。人麻呂は恋しい日並皇子を幻にみ、それが眼前の軽皇子になる、という太子再生の奇跡を歌によむようだが、この種の再生劇は、けつしてめずらしいものではない。（中略）人麻呂は、天皇や諸皇子を、「神」「日の皇子」としてつねに一体視し、「日並挽歌」では、「天照らす日女尊」に対比させた「高照らす日の皇子」に、ニニギノ命・天武天皇・日並皇子の映像を重ね合わせた。（中略）軽皇子は父に風貌を似せ、父のようにふるまうことを、支持者たちにいいふくめられ、人麻呂はまた安騎野の企画者たちに、太子再生の奇跡を歌うように命じられていた、と考えられてならない。^{註12}

木村康平氏も、「月」を草壁（日並）のことであると解釈しながら、同時に他方の「炎」もまた草壁の再生を象徴するものであるという。

神話的にいえば、草壁は新たな名を得て再生するのである。安騎野に宿る軽皇子の目的は草壁の古を思うことにあるが、今、草壁はそれに呼応し、「日雙斯皇子命」として軽皇子のうえに再生する。^{註13}

つまり「月」をどうとらえるにせよ、この歌は「過ぎにし君」（日並皇子）を再生させるための歌であり、「馬なめてみ狩立たしし時」（四九）は、天武Ⅱ日並Ⅱ輕の三代が一体化し、「太陽」Ⅱ「高照らす日の皇子」として出現する時である。それによって軽皇子の皇位継承者としての資格が保証されるとすることは、これまでになされてきたほぼすべての解釈に共通しているといつてよい。^{註14}

したがってこれらの説においては、たとえ四八番歌で西に傾く「月」を日並皇子ととった場合でも、「月」と日並皇子との結びつきはあまり重要視されていないといえる。「太陽Ⅱ天武Ⅱ日並Ⅱ輕」という図式は魅力的だが、人麻呂が描く「日並皇子」と月との関わりをもっと重要視して、これらの歌を理解することも可能なのではないかと思う。

2 月の皇子としての日並皇子

四八番歌の傾く「月」が日並皇子のことを表すと解釈することに対しては、批判もある。たとえば佐々木幸綱氏は、このように述べている。

月Ⅱ草壁皇子の寓意を表立ててしまうと、東には曙光があり「かへり見すれば」西の沈みかかった月があるⅡ前方に立太子前の軽皇子がおられ、「かへり見すれば」先年世を去られたばかりの前皇太子草壁がおられる、というあまりに図式的な何の詩的なふくらみもない一首になってしまふのだ。^{註15}

しかし一六九番の挽歌で「あかねさす 日は照らせれどぬばたまの 夜渡る月の 隠らく惜しも」と歌い、生きている天皇と逝去した日並皇子とを、輝く「太陽」と隠れる「月」の対比によって表した方法は、野に立つ「炎」と傾く「月」とを対比する四八番歌の表現方法ときわめてよく似ている。「日の皇子と日並皇子」とを、「太陽と月」の対比によって描こうとする人麻呂の意図は、A（日並皇子挽歌）、B（安騎野遊獵歌）の両歌群に一貫して認めることができる。

また「日並皇子」は、「日が二つあいならぶこと」、「日（天皇）とあいならぶ皇太子」の意とされているが、上野理氏が指摘している通り、これは『日本書紀』の神話のなかで「日に配（なら）ぶ」と表記される月神ツクヨミを意味していると思われる。アマテラスとツクヨミとスサノヲの三貴子による三界分治の神話は、ツクヨミの支配領域について次のように語っている。

是に日の神を生みまつります。大日靈貴と号す。此の子、光華明彩しくして、六合の内に照り徹る。故、二の神喜びて曰はく、「吾が息多ありと雖も、未だ若此靈に異しき兒有らず。久しく此の國に留めまつるべからず。自づから當に早に天に送りて、授くるに天上の事を以てすべし。」とのたまふ。是の時に、天地、相去ること未だ遠からず。故、天柱を以て、天上に送り挙ぐ。次に月の神を生みまつります。其の光彩しきこと、日に並げり。以て日に配べて治すべし。故、亦天に送りまつる。

(書紀五の本文)

伊奘諾尊の曰はく、「吾、御宇すべき珍の子を生まむと欲ふ」とのたまひて、乃ち左の手を以て白銅鏡を持ちたまふときに、則ち化り出づる神有す。是を大日靈尊と謂す。右の手に白銅鏡を持ちたまふときに、則ち化り出づる神有す。是を月弓尊と謂す。又、首を廻して顧眄之間に、則ち化る神有す。是を素戔鳴尊と謂す。即ち大日靈尊及び月弓尊は、並に是、質性明麗し。故、天地に照し臨ましむ。

(書紀五の一)

伊奘諾尊、三の子に勅任して曰はく、「天照大神は、高天之原を御すべし。月夜見尊は、日に配べて天の事を知らすべし。素戔鳴尊は、滄海之原を御すべし」とのたまふ。

(書紀五の一)

月神ツクヨミは「日に配(並)」ぶ、あるいは「日に並(つ)」ぐ神であり、太陽神アマテラス(オホヒルメ)と共に天に在つて世界を照らすという。したがつて「日並皇子」の名は、太陽に並ぶ光彩をもち、太陽と共に天に在つて夜の世界を照らすツクヨミのように、「高照らす日の皇子」天皇に並んで貴く、日の皇子の統治をもう一つの側面(夜)から支える「月の皇子」としての意味をなっていると考えることができる。そうであるとすれば、四八、四九番歌の解釈において、このような「月の皇子」が輕皇子と合体し、「太陽の皇子」として再生を遂げると考えるのは不自然であるように思われる。

人麻呂は輕皇子以外の皇子(長皇子、新田部皇子)に対して「やすみしし 吾が大王 高光る 吾が日の皇子」(二二九)、「やすみしし 吾が大王 高照らす 日の皇子」(二六二)と呼んでいる。しかしA、B両歌群において、日並皇子のことを「日の皇子」と呼ぶことはない。「高照らす日の皇子」天皇は、葦原の瑞穂の國を支配する「神の命」(ホノニギ)と重ね合わされ、その死は太陽女神アマテラスの岩戸隠れにたとえられる。持統天皇の治世は「あかねさす 日は照らせれど」と歌われ、「やすみしし 吾が大王 高照らす 日の皇子」輕皇子は、天降るホノニギのように突き進むとされる。太陽と強く結びついたこれらの天皇や皇子と、日並皇子とははっきりと区別して描かれているように見える。

ところでA、B両歌群中の日並皇子に関わる語句を見ると、月と関わりの深い語句が多くあることに気づく。

① 「望月の 満しけむと」(一六七)

日並皇子の治世を「満月のように満ち足りていただろうに」と想像する。『万葉集』の中に同じ表現が他に一例あり(三三二四 作者未詳)、やはり亡くなった皇子への挽歌の中で用いられているが、この歌には、人麻呂の日並皇子挽歌と共通する語句が多く見られる。

② 「大船の 思ひたのみて 天つ水 仰ぎて待つに」(一六七)

「大船の」は津、渡り、ゆくらゆくら、たゆたひ、思ひ頼む、などに掛かる枕詞としてしばしば用いられる言葉である。人麻呂は、天空を渡る「大船」について次のような歌を詠んでいる。

三六一 大船に 真楫繁貫き 海原を 漕ぎ出て渡る 月人

壮子

一〇六八 天の海に 雲の波立ち 月の船 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ

月(月人壮子)が「大船」に乗り、夜の天海を漕ぎ渡るという考へは、『万葉集』の人麻呂以外の歌にも認められる(一一九五、二〇四三、二二三三)。月が海の潮の干満と関係することから、月と海・水とは密接な関わりをもつ。『日本書紀』第五段一一の三界分治の神話では、ツクヨミは「滄海原の潮の八

百重」を支配することになっている。

また満ち欠けを繰り返す月は、「再生の水」をもつとされ、そのことは次の歌によく表れている。

三二四五 天橋も 長くもがも 高山も 高くもがも 月夜見の 持てる 変若水 い取り来て 君に奉りて 変若得しむもの

ツクヨミは「再生の水(変若水)」をつかさどると同時に、それが手に入らぬ人間たちに死をもたらし神でもある。現代の正月の若水の習俗が、このような月の持つ不死の水の觀念と結びつくことはよく知られている。人麻呂が仰いで待つ「天つ水」は、雨水を指すだけでなく、月の「変若水」の意を含んでいるとも考えられる。

③ 「真弓の岡に」(一六七)、「馬並めて 御狩立たしし」(四九)

日並皇子は「由縁もなき 真弓の岡に」殯宮を営んだと歌われる。月神ツクヨミが「月弓尊」(記、書紀、万)とも呼ばれるように、月と弓は強い結びつきをもつ。『万葉集』では月と弓の関係が、次のように歌われている。

二八九 間人宿禰大浦の初月(みかづき)の歌二首

天の原 ふりさけ見れば 白真弓 張りて懸けたり

夜路は吉けむ

二〇五一 天の原 行き手を射むと 白真弓 ひきて隠せる

月人壮子

一八一六 玉かざる 夕さり来れば 獵人の 弓月が嶽に 霞
たなびく

月は夜空に懸かった白真弓そのものであり、また月人壮子は白真弓を携えていると考えられているので、月と「真弓」の岡とはじつは深い「由縁」をもつ。また一八一六歌に見られるように、弓矢を持つ狩人は「弓月」の枕詞となっている。B歌群の最後に、日並皇子の「馬並めて 御狩立たしし」姿が出現するが、これは当然、弓矢を携えて狩りに出立する馬上の姿であると思われる。したがってこれは、白真弓を携えて狩りをする「月人壮子」の姿とも重なり合うものである。

ここまで挙げていくつかの語句は、それぞれ月だけと関わる言葉ではないが、全体として月に関わりの深い言葉が、日並皇子を偲ぶこれらの歌にまとまって現れていることは認められるのではないかと思う。

ここで、日並皇子が「月（ツクヨミ）の皇子」を意味しているとは見なしたうえで、冒頭の人麻呂の歌に立ち返りA・B歌群を見てみると、また別の解釈が可能になる。つまりこれらの歌は、太陽と月の対比に基づいて詠われており、天武・持統・軽皇子（文武）をアマテラス・ホノニギに連なる太陽の系譜の

うえに位置付け、日並（草壁）皇子をツクヨミ月系の系統に位置付けている。B歌群の最後（四八、四九）において、東の野に立つ「炎」と西に傾く「月」は、新しい太陽Ⅱ軽皇子と月Ⅱ日並皇子を表し、「御狩立たしし時」は新たな太陽のこの世（昼の世界）への誕生と、月の皇子のあの世（夜の世界）への旅立ちの時の到来を示しているように思われる。こうして月の皇子が太陽に並んで夜の天を支配し、太陽（持統・文武）によるこの世の統治を輔けることによって、世界の秩序が順調に維持されることになる。柿本人麻呂は草壁皇子を、けっして太陽になることのなかった「日並皇子Ⅱ月の皇子」として一貫して表現したのではないだろうか。

注

1 神野志隆光「「日並皇子命」をめぐる」『論集上代文学』笠間書院、一九八一、五一―六九頁。

2

澤瀉久孝『万葉集注釈』中央公論社、二〇〇一、小島憲之他『万葉集』（新編日本古典文学全集）小学館、一九九四、橋本達雄編『柿本人麻呂《全》』（日並皇子挽歌項目執筆・神田典城）笠間書院、二〇〇〇など。他に「日の御子」を「日並皇子」とする説（窪田空穂『万葉集評釋』東京堂出版、一九八四、大野晋他『萬葉集』（日本古典文学大系）岩波書店、一九五七）、「神の命」をホノニギとはまた別の神とする説（神野志隆光「神話テキストとしての草壁皇子挽歌」『美夫君志』五〇、一九九

- 五・三、一一一―一八頁）がある。
- 3 渡瀬昌忠「安騎野の歌」神野志隆光・坂本信幸編『セミナー万葉の歌人と作品』2 柿本人麻呂（二）、和泉書院、一九九九、一八九―二〇五頁。
- 4 森朝男「柿本人麿の時間と祭式―安騎野遊獵歌をめぐる―」中西進編『鑑賞 日本 の 古典』3 萬葉集、角川書店、一九七六、三五七―三六五頁。
- 5 坂下圭八「柿本人麻呂―安騎野の歌について―」『日本文学』二六、一九七七・四、一―三頁。
- 6 上野理「安騎野遊獵歌」山路平四郎・窪田章一郎編『古代の文学 2 柿本人麻呂』早稲田大学出版部、一九七六、五五―六五頁。
- 7 森前掲書（注4）。
- 8 辰巳正明『万葉集と中国文学』笠間書院、一九八七、一六七―一九七頁。
- 9 たとえば前掲の渡瀬（注3）、森（注4）、坂下（注5）もこの立場である。ただし「炎」を「けぶり（煙）」と訓じる説もある。（佐佐木隆「『萬葉集』四八番歌の〈東野炎立所見而〉」『学習院大学文学部研究年報』37号、一九九〇、一三一―一五八頁）。
- 10 次に挙げた研究者の他に、契沖（『萬葉代匠記』久松潜一校訂『契沖全集』1、岩波書店、一九七三、三五七頁）、尾崎暢映（『柿本人麿の研究』北沢図書出版、一九六九、二二二頁）、窪田前掲書（注2）なども傾く「月」

- が日並皇子の死を意味するところ、詳しい解説はない。
- 11 上野前掲書（注6）六四―六五頁。
- 12 上野前掲書（注6）六五頁。
- 13 木村康平「安騎野歌」橋本達雄編『柿本人麻呂〈全〉』笠間書院、二〇〇〇、四八頁。尾崎前掲書（注10）もこの立場をとる。
- 14 これまでに挙げた諸研究者の説の他に、たとえば神野志前掲書（注1）も、このように解釈する。また一部には中西進（『万葉の秀歌 上』講談社、一九八四、二八―三一頁）のように、これらの歌を比喩ではなく叙景歌であると見る説もある。
- 15 佐佐木幸綱『万葉へ』青土社、一九七五、四七―四八頁。